

マタイによる福音書27章1-26節 「ピラトの判決」

1A ピラトへの引き渡し 1-10

1B 死刑のための協議 1-2

2B ユダの後悔 3-10

2A 圧力に屈するピラト 11-26

1B 弁明をしないイエス 11-14

2B バラバによるイエス釈放の試み 15-19

3B 暴動の回避 20-26

本文

マタイによる福音書 27 章を開いてください。私たちは前回、イエス様がユダヤ人指導者たちによる宗教裁判を受けられたところを見ました。主ご自身が神の子キリストであると証言されたで、冒涇罪として死刑であると宣告したのです。その時に、ペテロが三度、イエス様のことを知らないと言ってしまいました。鶏が鳴く前にそうだということでしたが、次は夜明けから話が始まります。イエス様が、ユダヤ人の死刑方式である石打ではなく、ローマの十字架刑で死なれたその経緯を、福音書の著者たちは記しています。そしてその十字架刑は、宗教上の教義とは無関係であり、ローマにおける一般の法律や秩序に拠るものでした。私たちはこれから、異教徒でありユダヤ教徒は全く関係ない、いや敵意さえ抱いていたピラトが、なぜ彼らの要求を呑むようになってしまったのか、そのことを主に注目しながら見て行きたいと思います。

1A ピラトへの引き渡し 1-10

1B 死刑のための協議 1-2

- 1 さて夜が明けると、祭司長たちと民の長老たちは全員で、イエスを死刑にするために協議した。
- 2 そしてイエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡した。

前回詳しくお話しましたが、祭司長たちと長老たちはサンヘドリンによる刑事裁判を、彼らの決めた規定をことごとく破って行っていました。夜を明けて、神殿の境内にある「正義の殿堂」と呼ばれるところで行わなければいけません。その他にも、数多くの規定に違反していましたが、今、夜が明けたので形式上の議会を開き、イエス様を死刑に定めたのです。

しかし大きな問題があったのです。死刑には定めたものの、それを執行する権限がローマによって剥奪されていました。紀元後 6 年、ユダヤ、サマリア、イドマヤの地域がローマの直轄の属州になった時に、ユダヤ人が自民族に対しても死刑を執行することができなくなりました。そこで、ローマに死刑執行をしてもらわないといけなかったのです。それで当時のユダヤ属州の行政長官であ

ったピラトに引き渡したのです。ピラトは普段は、ユダヤの首都であるカイサリアに住んでいましたが、ユダヤ人の祭りの時にはユダヤを治めている者として、形式上の敬意を示すために、また騒動が起こらないように秩序を保つために、エルサレムに訪問していました。

ユダヤ人の石打ではなく、ローマの十字架刑になったのは、神の強い御心がありました。神は、預言者たちによって、キリストが死なれるのが十字架刑であることを暗示する表現を使われています。例えば、過越の祭りでは、いけにえの子羊は骨が折られていけないとされていました(出エジプト 12:46)。詩篇 34 篇 20 節にも、キリストの預言があり、「主は彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、折られることはない。」とあります。それは正しい者が守られて救われるという文脈の中で語られていることです。イエスは正しい方でした。しかし、石打の刑では、まず崖から突き落とします。そして骨折させて身動きできなくなっているところを、皆で石打にすることが多かったのです。十字架刑でも、息が残っていればローマ兵がその脛を折って、息を絶えさせるのですが、それでもその前に死ねば骨は折られずに済みます。

また、木につるされたものは、神に呪われたものであることが、申命記 21 章 23 節に書かれています。ガラテヤ書に引用されています。それから、イエス様はヨハネの福音書では絶えず、「上げられなければいけない」と言われていました。モーセが青銅の蛇を木の枝にかけて上げましたが、それと同じように上げられないといけないと言われました。さらに、詩篇 22 篇によるキリストが受ける苦しみについての描写は、十字架刑でなければ説明できないものになっています。「【口語訳】22:16 まことに、犬はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。」「私は、自分の骨をみな数えることができます。彼らは目を凝らし、私を見ています。(17 節)」手足を刺し貫いたという表現、また骨をみな数えることができ、敵どもが目を凝らして見ているという表現が十字架刑の描写に合致しています。

そして何よりも、ローマの十字架刑によって、そこで掲げられた罪状が、いくつかの言語で書かれていたのです。ユダヤ人のヘブル語だけでなく、ギリシア語でも、またローマの言語であるラテン語でも掲げられました。このことによって、十字架に付けられたキリストが、ユダヤ人を越えてギリシア人やその他の異邦人にも伝わるメッセージになったと言えます。イスラエルのためだけでなく、全世界のために来られた方でした。

当時の総督「ピラト」について、お話したいと思います。彼は、紀元 26-36 年にユダヤの総督でした。ですから、ちょうど彼の任期の真ん中辺りにこの出来事がありました。福音書だけ読むと、彼はイエスを無実にしようとしている良心的な代官のように見えますが、いいえ、正反対の人間です。ルカ 13 章を見ると、なんと「ピラトがガリラヤ人のたちの血を、ガリラヤ人たちが献げるいけにえに混ぜた(1 節)」とあります。ユダヤ人を憎悪しており、またユダヤ人たちもピラトに敵対していました。歴史家ヨセフスによれば、ローマのやり方を持ち込んでユダヤ人の反感を買ったのですが、

神殿のための税金を水道建設に流用したとも書いています。神殿の中にローマの神々と偶像を刻んだ盾をつるしたという記録もしているそうです。問題の多い、ユダヤ人の住むこの地域を治めるのは、ローマの総督は嫌がっていたそうですが、ピラトは彼らを痛めつけることによってストレス発散をしていたようです。¹

しかし、総督が自分の治めているユダヤの民から騒動でも起こるものならば、それが皇帝に知られるものなら、自分が罷免させられることは必至であり、非常に神経を使っていたと思われます。ところが、ユダヤ人の間でのいざこざを持ってこられた、厄介な案件を持ってこられたということでもあります。彼がイエスという男と関わったのは、わずか数時間だったのですが、それによって使徒信条の中で名前が出て来るほどに、有名な人になってしまいました。こんな男と関わりたくないと思っている人々が多いことでしょう、けれどもイエスという方に触れたら、付き合いざるを得ないということなのです。

2B ユダの後悔 3-10

3 そのころ、イエスを売ったユダはイエスが死刑に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちと長老たちに返して、言った。4 「私は無実の人の血を売って罪を犯しました。」しかし、彼らは言った。「われわれの知ったことか。自分で始末することだ。」

イスカリオテのユダは、イエス様を祭司長たちと長老たちに引き渡したものの、その結果、死刑が出たことを、この夜明け後の判決を聞いて知りました。彼は、そこまでの重罪が出るとは予想していなかったのでしょう。ユダヤ人指導者には殺意があったし、イエス様ご自身が死なれることをはっきりと予告しておられたのにも関わらず、彼はそこまで想像できていなかったのです。

そして「後悔し」とあります。ここでのギリシア語は、「メタメロマイ」というもので、悔い改めを意味する「メタノイア」ではありません。ここが 26 章の最後に出てきたペテロとの大きな違いです。ペテロは、イエス様に対して傷つくようなことをしたことを悔い、激しく泣きました。イエス様が言われた通り、霊は燃えていても肉は弱い、そして鶏が鳴く前に自分が三度、知らないということなのだど気づき、そのとおりで同意しました。あくまでもイエス様とその言葉を相手にして悔いています。ユダの場合は、イエス様はある意味で他人事にしてしまっています。無実の人の血を売ってしまったことは後悔していますが、彼は心をイエス様に注ぐことはしませんでした。そのため、後悔の念は自分自身に向き、自殺したのです。悔い改めと後悔の違いは、前者は相手との関係、愛の関係を持っています。後者は、自分自身の中に埋没して、留まっています。前者は、神とキリストに目が向いていますが、後者は自分にしか目が向いていません。人類最大の罪は、神とキリストに信頼を寄せない罪、関わろうとしない罪であります。

¹<http://seishonyumon.com/glossary/%E3%83%9D%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%AA%E3%83%BB%E3%83%94%E3%83%A9%E3%83%88/>

ユダの口から、「無実の人の血を売って罪を犯しました。」と出ています。これからピラトの口からも出て来るし、そして十字架で死なれたイエスの姿を見て、百人隊長の口からも出てきます。死罪とは全く関係のない方であることが分かりますし、罪なき生涯を全うされたことを証しています。

ユダヤ人指導者たちの「われわれの知ったことか。自分で始末することだ。」という言葉は、あまりにも非情です。今、世間でよく言われている「自己責任論」とでも言いましょうか。確かにイスカリオテのユダが受け取った銀貨三十枚なのですから、彼らには知ったことではありません。自分で始末すべきです。けれども、彼らこそがユダの力を借りて、無実の人の血を流している罪を犯しているのです。

5 そこで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして出て行って首をつった。6 祭司長たちは銀貨を取って、言った。「これは血の代価だから、神殿の金庫に入れることは許されない。」7 そこで彼らは相談し、その金で陶器師の畑を買って、異国人のための墓地にした。8 このため、その畑は今日まで血の畑と呼ばれている。

ここの「神殿」というのは、ギリシア語でナオスといって、祭司たちのみが祭壇でいけにえを捧げるなど、祭司たちのみが入って、儀式を行うことのできる敷地のことです。一般のイスラエル人の礼拝者が入ることのできる場所まで来て、そこからその神殿の敷地に投げ入れたのでしょうか。そして、彼らは「これは血の代価だから、神殿の金庫に入れることは許されない。」と言っています。律法の中(申命 23:18)に、汚れたことのために使われた金は神殿の金庫に入れてはいけないことが書かれています。彼らはこうした律法には熱心に従っていますが、肝心の正しい方の血を流すという大きな罪にはまるで気づいていません。

そして、陶器師の畑を、使徒行伝 1 章のペテロの説明によるとイスカリオテのユダの名義で購入し、在留異国人のための墓地としたとのこと。これをアケルダマ、血の畑と呼ばれていて、今は修道院の施設がそこにあります。ヒノムの谷にありますが、ケデロンの谷と合流するところの近くにあります。

イスカリオテが首をつって自殺したのですが、使徒行伝 1 章にあるペテロの説明では、こう言っています。「1:18 (このユダは、不義の報酬で地所を手に入れたが、真逆さまに落ちて、からだは真逆二つに裂け、はらわたがすべて飛び出してしまった。)-一方では首を吊ったと証言し、ペテロは、真逆さまに落ちてしまったとあります。ここには、当時の背景があります。ヒノムの谷は、旧約時代からごみ捨て場になっていましたし、犠牲の動物の残りを捨てたり、人間の死体も遺棄する場所でもありました。そこは焼却の火が絶えず燃えており、その死体を喰らう蛆もわいており、イエス様はそれを使って、地獄の姿を言い表されました。そのヒノムの谷がゲヘナと呼ばれていたのです。

もう過越の祭りに入っていて、イスカリオテのユダが首をつって死んだその遺体をそのままエルサレムの中にしておくことはできません。けれども、遺体の埋葬はそれもまた汚れますから、埋葬ができない遺体は南の城壁から、ヒノムの谷に投げ捨てられました。そして祭りが終わってから、埋葬する人がやって来て、遺体を埋葬していたのです。ですから、首をつって死んでいたユダの遺体を、ヒノムの谷に投げ込んだ時に、ペテロが言ったとおりのことが起こったと言えそうです。すると、次の預言がなおのこと、現実味を帯びます。

9 そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。「彼らは銀貨三十枚を取った。イスラエルの子らに値積もりされた人の価である。10 主が私に命じられたように、彼らはその金を払って陶器師の畑を買い取った。」

この預言は、直接的にはゼカリヤ書(11:12-13)からのものです。けれども、マタイはエレミヤの預言であるとしています。それもそのはず、預言者ゼカリヤはエレミヤ書 19 章にある預言を後追い、フォローして預言しているであろうからです。

エレミヤ書は、バビロンによってエルサレムが滅ぼされる預言がたくさん書かれています。19 章には、ベン・ヒノムの谷に対して預言をしているところです。しかも、主はエレミヤに、陶器を買いなさいと命じておられます。そこに「陶片の門」というのがあって、そこからヒノムの谷に入ることができます。その谷では、なんとおぞましい幼児犠牲が行なわれていました。かつてカナン人が行なっていたことであり、それによって神がヨシュアたちの軍によってカナン人に対する裁きを行われていましたが、よりによってユダヤ人たちが、周囲の民の慣わしを取り入れて、偶像のいけにえとして幼児を火で焼いて捧げていたのです。そこでエレミヤは、そこで自分が購入して持ってきた陶器の瓶を砕きます。そして、エルサレムの都はこのようになると預言しました。そしてエルサレムに住む者たち、王たちの家々が破壊され、彼らの遺体が同じところで一杯になると預言したのです。バビロンが来て、彼らの遺体をそこに放り投げて行ったことで成就したのです。

エレミヤの時代にバビロンによってエルサレムが破壊された出来事は、今、ローマによって起ころうとしています。イエス様が何度となく予告された、ローマによるエルサレムの破壊です。紀元 70 年に、ヨセフスによればヒノムの谷に殺されたユダヤ人の遺体が積み上げられていたそうです。こうやって、初めにエレミヤが預言し、それがバビロン捕囚だけでなく、ローマによる世界離散をも予見する言葉になっていました。ゼカリヤが改めて銀三十枚の預言と共にそのことを語り、エレミヤが陶器の瓶を砕いたその場所で、陶器師の畑を祭司たちが買いました。また、ヒノムの谷に多くの者の遺体が捨てられたように、ユダもそこで捨て置かれたのです。いろいろな預言が折り重なるようにして成就していきました。

2A 圧力に屈するピラト 11-26

1B 弁明をしないイエス 11-14

11 さて、イエスは総督の前に立たれた。総督はイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは言われた。「あなたがそう言っています。」12 しかし、祭司長たちや長老たちが訴えている間は、何もお答えにならなかった。13 そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにも、あなたに不利な証言をしているのが聞こえないのか。」14 それでもイエスは、どのような訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。

イエス様が、総督官邸に連れて来られています。総督官邸は、二つの可能性がいわれていますが、今の神殿の丘の北に隣接していたアントニオ要塞が一つ。もう一つは西にある神殿に次ぐ代表的な建築物であったヘロデの宮殿です。ヘロデの宮殿と言っても、ヘロデ大王のことで彼が死んだ後、ローマがそこを総督が滞在する所としていました。今のヨツパ門の入口にあるダビデの塔のところに、その時代の囚人の牢屋が見つかっています。そこに十字架刑に処せられる者が幽閉されていた可能性があります。

ピラトは、残酷な人間でありましたが、行政長官ですからローマの法を守っている男でした。まずは訴訟を聞かねばなりません。その中で祭司長たちや長老たちの訴えたものが、「彼がユダヤ人の王と言っている」ということでした。ユダヤ人たちの宗教裁判では冒涇罪で死刑でありましたが、それはローマにとっては有罪でも何でもなく、ユダヤ人の律法に関することですから、何の関係もありません。それで彼らは、当時、ユダヤ人の熱心党たちが繰り広げていた反ローマ抗争を思わせるような訴状にしました。つまり、ユダヤの民を惑わせて、カエサルに税金を納めさせることを禁じ、また自分がユダヤ人の王キリストだと言っているということです(ルカ 23:2)。映画「復活」の初めのシーンにも出てきますが、当時のローマはこうした反逆に対する鎮圧を行っていました。その首謀者らは、十字架に磔にして殺して行っていました。全ての訴えが、偽りなのですが、それでもユダヤ人の王であるというのは、言葉だけ聞けば相当深刻な、ローマに対する挑戦です。カエサル以外に王がいると言っているのですから。

そしてこれが十字架にイエス様が磔にされていた時の罪状として、掲げられます。非常に興味深いことに、イエス様がお生まれになって間もなくして、東方からの賢者たちがやって来て、彼らはユダヤ人の王を拝みに来ましたと言って、ヘロデを恐れさせました。そして今、ローマがこれはユダヤ人の王であるとして、十字架に磔にしています。事実、イエスがユダヤの王、そして世界の王であるからこそ、その張本人が十字架に付けられ苦しみを受けられるというのが、神の御心であったわけです。それが、あまりにも驚きであり、だれも考えつきもしなかったというのが、聖書のメッセージです。「I コリ 2:8-9 この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。しかし、このことは、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛す

る者たちに備えてくださった」と書いてあるとおりでした。」ユダヤ人の王、世界の王であられる方が、あえて僕の姿を取り、私たちに仕え、罪の対価を支払うことまでしてくださいました。

そして、ピラトからの問いかけがありました。訴状を聞いて、それから被告人に尋ねて、そして何度か言葉を交わして、判決を下すからです。ユダヤ人の王なのかという尋問に対して、「あなたがそう言っています。」と答えられています。その通りです、ということです。けれども、ヨハネ 18 章での言葉のやり取りにおいては、イエス様はご自分の国はこの世のものではないと言われていて、ピラトは、あまりにも次元の違うことを話していることにすぐに気づきました。政治的な意味合いでの国ではなく、彼らの宗教上の話をしているんだな、同じ「王」であっても、話にならない次元の違うことだと察知していました。

ところが、祭司長たちや長老たちからの訴えは続きます。それに、全く答えられないことにピラトは非常に驚いています。ここからピラト自身が、イエス様に引き込まれているのが分かります。これまでの被告人とはまるで違う、それこそ次元の違う人物であることを感づいたからです。イエス様は、イザヤの預言を心に留めておられたことは確かです。「イザ 53:7 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」

なぜイエス様は口を開ざされることによって、何を示しておられたのでしょうか。その、イザヤの預言の前後を見るならば、「私の民の背きのゆえに打たれ」とあります。「主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた」とあります。それゆえ、弁明しようものなら、イエス様ご自身には不法はないのですから、無実がすぐに晴れてしまいます。けれども、そうしたら有罪にされることなく、十字架を免れてしまうのです。ゆえに、屠り場に引かれて行く羊のように口を開かなかったのです。

それでピラトはかえって、イエスが正しいことを知りました。ご自分に不利な訴えに口を開かないことに、そこにただなる正しさと聖さを感じたことでしょうか。皮肉ですが、あまりにも正しいので、不利な証言に対して答えることさえなかったと言ったらよいでしょうか。山上の垂訓でイエス様が、「聖なるものを犬に与えてはいけません。また、真珠を豚の前に投げてはいけません。(7:6)」ということなのかもしれません。

2B バラバによるイエス釈放の試み 15-19

15 ところで、総督は祭りのたびに、群衆のため彼らが望む囚人を一人釈放することになっていた。16 そのころ、バラバ・イエスという、名の知れた囚人が捕らえられていた。17 それで、人々が集まったとき、ピラトは言った。「おまえたちはだれを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」

ピラトは、イエスを釈放するための方策を考えました。おそらく、これからの十字架への道の話を考えてこういうことだったのだらうと思います。既にピラトには、十字架に付ける三人の囚人がいました。そしてこのバラバは、その中でも悪名高き殺人者だったのでしょう。熱心党によるローマへの反逆を先導し、そこでゲリラ戦を行い、またテロリスト的な残虐なことも行なっていたと考えられます。今で言うなら、パレスチナのハマスのような含みではないでしょうか。けれども、過越の祭りの時に、ユダヤ人たちが、民族意識が高揚してローマへの暴動もしかねないような時に、特赦にする慣わしがあったのです。それに、このバラバという男のフルネームは、「バラバ・イエス」です。キリストと呼ばれるイエスが一方にいて、もう一方にバラバ(父の子)と呼ばれるイエスがいました。この違いはあまりにも明らかです。

そしてピラトも、馬鹿ではありません。棕櫚の聖日以降、群衆たちがイエスを彼らのキリストとして迎え入れ、歓喜に満ちてエルサレムにイエスが入って来られたことぐらい、調べているはずです。今、宗教指導者はイエスに反対しているけれども、イエスには群衆はついて行くだらうと判断しました。彼は、何が正しいのかというよりも、このように政治的な思惑で動いています。

18 ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことを知っていたのである。

ピラトは元々、ユダヤ人を嫌っていたし、またユダヤ人たちもピラトを嫌っていました。彼らが、まさかカエサルに忠誠心をもって、こんな訴えをしているのではないことは、はっきり分かっています。これこそフェイク、胡散臭さが充満なのです。

19 ピラトが裁判の席に着いているときに、彼の妻が彼のもとに人を遣わして言った。「あの正しい人と関わらないでください。あの人のことで、私は今日、夢でたいへん苦しい目にあいましたから。」

異様なことが起こっています。夫が裁判の席に着いているのに、そこに妻が自分の意見を差しはさんでいます。ピラトは、ユダヤ人の中で起こっている出来事について、侮蔑と軽蔑をもってこれまで眺めてきましたが、自分自身が当事者になりつつあることに気づいていたでしょうか。妻の名はキリスト教の伝承では、クローディアといって、後に信者になったと言われます。けれども当時は、全くの異邦人で、全くの異教徒です。主は、そのような人にも夢をもって示して、ピラトに遣わし、警告を与えていました。彼女の訴えは、「あの正しい人と関わらないでください。」です。言い換えれば、「政治的な対処など、考えもしないでください。いつものようなやり方で、ユダヤ人に関わらないでください。そういったことを越えた、正しい人なのですから。」ということです。とつとつ、無罪判決を出して、このいざこざから身を引いてくださいということでしょう。

けれども、人はプライドを持っています。本当は、危機感をもって自分を変えないといけないでしょう。けれども、ピラトは残念ながら関わってしまいます。

3B 暴動の回避 20-26

20 しかし祭司長たちと長老たちは、バラバの釈放を要求してイエスは殺すよう、群衆を説得した。

ピラトが、妻から遣わされてきた人の話を聞いているうちに、なんと形勢が一気に変わってしまっていました。祭司長たちと長老たちが、群衆を説得するのに成功してしまったのです。一方は、ローマ総督です。もう一方は、曲がりなりにもユダヤ人の民族主義者です。あなたは、どちらを選ぶのですか？につつきローマ当局の言うことを呑むのですか？ということでしょう。そして、もう一つは、彼らは宗教指導者であり、権威者です。「ローマの人間が言っていることよりも、我々の指導者が言っていることが正しいはずだ。」となったことでしょう。ああ、群衆の心理というものは、恐ろしいものです。民族意識と権威主義によって、簡単に右から左へとなびいてしまいました。

21 総督は彼らに言った。「おまえたちは二人のうちどちらを釈放してほしいのか。」彼らは言った。「バラバだ。」22 ピラトは彼らに言った。「では、キリストと呼ばれているイエスを私はどのようにしようか。」彼らはみな言った。「十字架につけろ。」23 ピラトは言った。「あの人がどんな悪いことをしたのか。」しかし、彼らはますます激しく叫び続けた。「十字架につけろ。」

ピラトは、三回問い質しています。それぞれが異なる問いかけになっています。第一回目は、どちらを釈放してほしいのか？と問い質しました。当然のごとくイエスだと思っていました。ところが、バラバだと叫ぶのです。第二回目は、量刑を尋ねています。ピラトが、「キリストと呼ばれているイエス」と言っていますが、これは皮肉を込めて話しているのでしょうか、単なる人間にしか過ぎないがあなたがたの間でキリストと呼ばれていますが、と言っています。けれども、刑にはいろいろあります。競技場で獣が放たれて、噛み殺されるようにすることもあります。また、流刑もあります。けれども、十字架刑だけはとてつもない極刑です。なんと群衆は、十字架だと叫ぶのです。

そしてペテロは、あまりにも無実であることが明らかなので、三回目は、「あの人がどんな悪いことをしたのか。」と真っ直ぐに問い質したのです。それに対して、十字架だと叫んだのです。もう、自分たちで何を叫んでいるのか、分からない状況になっていたことでしょう。群衆心理というものです。

24 ピラトは、語ることが何の役にも立たず、かえって暴動になりそうなを見て、水を取り、群衆の目の前で手を洗って言った。「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」

彼は自分に責任がないことを示すために、敢えて手を洗いました。実はこれ、ローマの慣習にはなかつたそうです。むしろ、ユダヤ人たちのしていることを皮肉交じりに取り入れているそうです。律法の中に、誰かが刺殺されていたら、そこから距離を測って最も近い町の人たちがやって来て、そこで祭司長たちを連れて来て、彼らの前で、町の長老たちが手を洗います。そして、「私たちの手は

この血を流しておらず、私たちの目はそれを見ていない。(申命 21:7)」と誓います。

けれども、興味深いことに先の祭司長がユダに言った言葉と同じですね、「おまえたちで始末するがよい。」とのこと。悪い意味の自己責任論です。自分たちで始末するのは、確かにそうでしょう。けれども、ピラトが総督として、きよい良心をもって判決を下さないといけないのに、政治的な思惑でイエス様の処刑に関わったのです。

25 すると、民はみな答えた。「その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に。」

裁判官の呼びかけに対して、民が答えています。その血が自分たちだけでなく、なんと子どもらの上にもと言っています。このことは、残念ながら紀元 70 年に起こってしまいました。その時から四十年後に起こりました。そこで叫んでいる子どもたちに、イエス様をメシアとして受け入れなかったことによって、ローマによって散らされてしまうという神の裁きを受けるのです。

聖霊が弟子たちに下り、それからペテロがユダヤ人たちに福音を力強く語りました。その時に、ここで彼らが行なったことについて、罪からの悔い改めを説いています。使徒 3 章 13-19 節です。

13 アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち私たちの父祖たちの神は、そのしもべイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたはこの方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その前でこの方を拒みました。14 あなたがたは、この聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦免するように要求し、15 いのちの君を殺したのです。

しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。16 このイエスの名が、その名を信じる信仰のゆえに、あなたがたが今見て知っているこの人を強くしました。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの前で、このとおりに完全なからだにしたのです。

17 さて兄弟たち。あなたがたが、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行いをしたことを、私は知っています。18 しかし神は、すべての預言者たちの口を通してあらかじめ告げておられたこと、すなわち、キリストの受難をこのように実現されました。19 ですから、悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られます。

その流血の罪は、悔い改めによって拭い去られることができます。私たちの犯した罪は、悔い改めによって拭い去られることができます。

26 そこでピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架につけるため

に引き渡した。

ついにピラトは、バラバではなくイエスを十字架刑に決めました。「鞭打ってから」とありますが、単なる革製の鞭で打ったのではありません。ユダヤ人にも鞭打ちの掟がありますが、律法の 40 回にしたがって、39 回で止めます。しかも、短い革の紐で背中だけ打ちます。痛いけれども死ぬことはありません。しかし、ローマは違います。回数に制限はありません。死に至ることもあり、兵士が着かれるまで打ちます。長い革ひもで、その先に釘、ガラス、骨、鋭利な金属片を入れていました。背中だけでなく、胸、脇腹、顔まで打たれます。それで背骨が見えたり、内臓や目が飛び出すこともありました。それによって自白を強要するのです。あのパッションの映画に出てくる場面そのものです。

ところで、マタイとマルコは、十字架判決の後で鞭打ちが書かれているようになっていますが、実際はルカやヨハネにあるように、判決前に行っています。マタイは敢えて、ピラトの判決と、イエス様が受けられる苦しみと痛みを分けて書くために、後ろの方に持ってきていると考えられます。ですので、鞭打ちは判決の前に行っており、これは自白を引き出すためのものです。その苦しみと痛みを私たちは次回、26 章後半でじっくりと見て行きます。

私たちはこの時点で、イエス様の顔立ちは損なわれ(イザヤ 52:14)、イザヤが預言した通りになったことを思い出したいと思います。そして、体にとてつもない損傷を受けられました。それは私たちの罪のためです。そして、私たちの代わりに罰を受けられることによって、私たちが癒され、平安を持つためであるとイザヤは預言しました。そしてパウロは言いました、「Ⅱコリ 5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。」